

大神惟基と海民佐伯是基 (三)

會員 佐 脇 貫 一

⑨ 大神惟基と佐伯の是基

天慶四年十一月、西國賊首藤純友之次將、佐伯是基下生野津左衛門府。太宰府解文云、賊徒襲求管日向國、去八月十七、十八兩日合戰、官軍有利。討殺凶賊之中、生獲件是基仍進上、又剽進賊首藤原生行首。

同府解文云、豊後國九月十三日解休、藤原當國海部郡佐伯院、爰追討凶賊使權少式源朝臣經基、始從中府至千箇時、合戰之間、生獲件生行並擊殺賊徒、及討取馬、船、絹綿、戎具、雜物。(本朝世紀)

これは藤原純友の一味として、天慶の乱の首魁であった佐伯の是基についての記録である。鶴谷外史はこの記録によつて、佐伯の是基は大神惟基に相違ないとし、惟基の生年と伝えられる弘仁二年は伝承の誤りで、生年はおそらく寛平四、五年であらうと推定、壮年四十八才の惟基を天慶の乱に活躍させた。そして乱後官軍に生獲られて左衛門府に送致された佐伯の是基は、すなわち大神惟基のことで、大友興廢記等にある「惟基都のばりの説話」は、この史実を物語化したものであるとしている。

大神惟基を佐伯の是基として、天慶の乱に活躍させるためには、たしかに弘仁二年の生れでは都合がある。また、寛平四、五年の生れとして、天慶に活躍させて元元

永元年の没年で、寛平、元永間二百二十余年の空間が埋まらない。惟基死没の年齢は九十三才と伝えられる。

そこで結論からいおう。佐伯の是基は決して大神惟基ではない。前にもふれたように、大神惟基は豊後大神氏であるが、単一の個人ではなく、始祖をふくめた数代假名である。従つて豊後南郡(海部・大野・直入)の關畧領主である大神氏の偶像であるといつてよい。それと白杵、三重地方の仏教文化(寺塔や石仏)が、真名の長者の名で伝えられていることと関連し、中野憐能氏のいうように、宇佐・國東の仏教文化を潤察した宇佐氏五代(公忠・公則・公相・公基・公通)に対して、大野川流域(白杵地方をふくむ)の仏教文化を創造した大神氏五代(惟基の名で代表される)惟基、惟盛、惟衡、惟用、惟深)があったのである。

⑩ 天慶の乱と藤原純友

それでは藤原純友の次將であった佐伯の是基とは、どのような人物であらうか。この問題を解くためには、天慶の乱(承平・天慶の乱ともいう)とは、どのようなものか知らなければならぬ。

貞觀四年五月、近者、海賊往々成群、殺害往還之諸人、掠奪公私之雜物。(略)是日、下知播磨・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐等國、差察人夫、追捕海賊。(三代實錄卷六) 律令政府の紀綱がゆるみはじめると、諸國では國司の選任が行なわれ、現地官吏の汚職がめだち、國府の威令が薄れた。そのため野盜・海賊の輩がはびこり、とくに瀬戸内海域では、貞觀年間に入ると海賊の横行が多く、しばしば公私の被害が訴えられるようになった。これは貞觀四年五月に布告された海賊追捕令で、朝廷はさらに

貞観七年、同八年、同九年と諸國に對して、往來船の監視也海賊の追捕を告示してゐる。

もつとも、貞観以後承平元年にいたる約七十年間は、國史も編纂されず、海賊の跋扈について、まったく史料がないので、その間の事態はわからないが、貴族中心の政治体制から離反して行く民衆の動きがある以上、反政府的な賊徒の行動がなかつたとはいえないだらう。

さて、海賊の動きが再び活潑になるのは承平元年からである。朝廷は承平三年(九三三)南海諸國に警固使を設置して、海賊の横行をキエックしたが、同四年に追捕海賊使をおいて、積極的な檢索を行なつた。ところがその年冬、伊予國喜多郡の不働叡三千余石が、海賊に奪われるといふ事件が発生した。同六年朝廷は、紀淑人を伊予守に補し、追捕南海道使に任じて海賊の鎮定にあたつたが、またかもそのころ關東で平將門が叛乱をおこし、いわゆる承平・天慶の乱が勃発した。

藤原純友が瀬戸内の海賊を糾合して、叛心を露呈したのは天慶二年(九三九)十二月で、關東では平將門が下野の國衙を陥れて、新皇と自稱してゐた。この純友は藤原北家の一族で、筑前守兼大宰少式であつた藤原良範の子、いまを時めく藤原貴族の出であるが、純友追討記に「性鷲^{シウ}鷹^{キョウ}(鷹のように鋭深く、道理に厚くこと)礼法に拘わらず」とあるように、貴族社会の慣習に従わず、ことごとく宗家に反抗的態度をとつた。そうしたことから京師を追われて伊予掾となり國府にあつたが、承平六年紀淑人が伊予守・追捕南海道使となつて赴任すると、その下で追捕海賊使を兼ねた。やがて掾としての任が解けた純友は、帰京せず、そのまま土着して海賊の群れに投じた。彼は海賊蜂起の動きを利用して、宗家転覆の野望をいだいたのである。

純友が拠つた宇和郡日振島(愛媛県北宇和郡宇和海村)は、宇和島市から海上二時間の航程にある。豊後水道のまつた中に位置し、たえず黒潮に洗われている孤島である。周囲二二倍のこの島は、瘦せた鳥が羽をひろげて飛んでいる形をしているが、平地はほとんどなく、断崖に開かれ岩骨墨々たる島で、断崖の切れ目の入江に、ようやく小集落が点在している。まったく海賊島とよぶにふさわしい。(略)一方、この島は豊後水道を挟む豊予兩國で勢力を張っている海民、佐伯部出身の豪族たちの武力を利用するにも適していた。それは純友の副將として、乱の最後まで勇猛果敢に闘つた佐伯、是基が、豊後國海部郡地方に勢力を張つていた豪族であつたことなどからも考えられる。

(中)中嶽雄著「愛媛県の歴史」

天慶三年(九四〇)二月、純友のひきいる賊党は、淡路國を襲つて兵を奪取し、八月讃岐の國府に乱入して、讃岐分藤原國風を敗走させた。かくて伊予・讃岐兩國をその支配下に置き、進んで備後・周防・紀伊の國々を荒し、豊後水道から宇和海に入り、土佐國幡多郡一帯を放火掠奪した。このように純友勢の行動範囲は広く、紀伊水道から瀬戸内海域、さらに豊後水道・宇和海・日向灘方面にまで及んだ。朝廷では純友の叛乱平定のため、諸國の社寺に祈願・修法を命じた。また小野好古を追捕凶賊使、源経基を同副使に任じて、官船二百余艘を調達、伊予國に向つたが、これを迎撃した純友勢は、兵船千五百艘で官船に数倍する勢力。好古、経基という智勇の將にひき、いられた官軍もほどこす隙がなかつた。しかし対峙して年を越し、天慶四年二月になると、純友の次將であつた藤原恒利が、追討軍にいた藤原國風のもとに投降、海賊たちの泊地も隠れ家、その拠点などについて詳しい情報

を提供したため、しだいに兵力を增強し友官軍は優勢となり、各所に賊兵を破った。敗走した純友は豊前に遁れ、田川郡の香春岳に拠ったと伝えられるが、やがて賊軍を糾合し、同年五月、転じて筑前の博多津を襲撃、これを占領して内陸に侵入し、大宰府を攻め、都府楼を焼き払って累代の財宝を掠奪した。

大宰府を焼き払ったという報告に接して朝廷は大いに驚き、参議藤原忠文を征西大将軍に任じ、小野好古、源経基、藤原慶幸らと協力して純友を討伐するよう命じた。ここに於いて好古は勇士をひきいて筑前に入り陸から、藤原慶幸は伊予の警固使橘遠保や、降將藤原恒利らを従えて海上から、純友勢が本拠にしていた博多津に猛攻を加えた。海陸から攻撃する官軍の精銳に打ち破られ、滅滅窮乏大敗を喫した純友は、ようやく包圍から脱出して、小船で伊予に逃げたが、橘遠保の軍兵に捕えられ、一子重太丸とともに斬られた。

② 海部公と佐伯の是基

純友の副將(本朝世紀は次將とする)であった佐伯の是基は日振島にあって、豊後水道や宇和海の制海権を握り、純友勢の後衛となっていたが、五月、純友が豊前に敗走すると、これを援護してその再挙を容易にし、純友勢が筑前海岸を襲い、博多津を占拠すると、海部も賊首桑原の生行をやつて、大宰府襲撃に参加させた。海陸から攻撃する優勢な官軍のため、博多の本拠を衝かれて大敗した純友は、小舟で伊予に遁走したが、当時豊前方面にあって官軍と戦っていたと思われる佐伯の是基は、賊軍を集めて南下、桑原の生行とともに豊後海岸一帯を荒らし、内陸に侵入して丹生の郡衙を攻め、もはや昔日のおもかげはなかつたが、海部公の祭祀を続けていた海部氏

を滅亡させた。やがて純友が斬られて、その築窟である日振島の本拠を掃蕩するため、源経基らの官軍船が南下を開始した。佐伯の是基、桑原の生行らは徳門の海(佐伯湾)に入り、佐伯院を襲い、貯蔵した粗米、調庸の雜物を奪取、役宅を占領してこれを城砦化した。そして八月、數百の賊船は、是基・生行らにひきいられて、日向國英多地方の海岸を劫掠したが、追展してきた源経基のひきいる官軍と遭遇、船戦が行なわれた。本朝世紀によるとこの合戦は八月十七、十八両日となつてゐる。

賊魁藤原純友の首が京師に送られたのは七月七日、是基らが日向に入ったのは、ひしひしと迫る官軍の攻勢をかわずためであつた。彼らは出来得るならば、官軍との遭遇を避けて、再起の機会を稼いだかつたに違いない。ともあれこの合戦で是基は生獲られ、生行は捕えられ斬殺された。なお是基は生獲といふことになつてゐるが、これは降服したものであらう。

佐伯の是基は田中成雄氏もいふように、豊予二州の間に海民として活動した佐伯部が首長であらう。その出身は海部郡徳門郷のうちに設置された佐伯部であつて、是基といふ名は彼の假名と見てよい。桑原の生行は海人族の出で、勇猛ではあるが残忍な賊首であつたらしい。是基の生れたころは、豊後大神氏の興隆時代で、臼杵荘や三重郷を中心に文化の花が開きはじめた。丹生郷の海部氏は寥寥として、大神氏の隆盛に拮抗することゝができた。大神氏の宗家は「惟基」といわれてゐるが、誰もその人物に会つた者はなく、その出生譚である姫岳の神異は領民たちに信じられていた。佐伯の是基もちろん惟基にあやかつた名で、大神氏が官吏海部氏に代る海民(海人族)の統率者として、佐伯部の首長是基をえらんだからである。

② 海民のボス佐伯の是基

ここに海部郡徳門の佐伯部について一考しなれば、古くは、倭国対策として諸國に佐伯部が移設されたのは、大化以前(六世紀後半から七世紀前半)といわれるが、徳門郡の佐伯部も、そのころ安芸あるいは伊予から移されたものであらう。そして海部の民と佐伯部の民が、郷の南部に一つの共同体をつくったのである。それが佐伯と呼ばれる土地で、八世紀後半に佐伯院が設置され、十世紀ないし十一世紀のころ佐伯荘となり、徳門郡のほとんどを吸収するようになった。

さて海部公(海部郡大領)が海部郡全域を支配していたころ、徳門郡の佐伯には海民となつた佐伯部の首長がおり、半自治的を敷か所の里(こぶと)をつくらせていた。八世紀後半から九世紀にかけては、海部氏(海部公)の勢威も盛んであつたが、大野郡緒方荘に興つた大神氏が、三重郷に進出し、臼杵荘に食指をのびすようになる。海部氏はしだいに圧迫された。やがて大神氏は臼杵荘を拠点にして、じりじりと南北にその支配國を拡げたが、積極的に海部氏の覆滅をはかるようなこととはしなかつた。

佐伯部の首長といつても、佐伯湾岸の海民集落のボスであつた是基は、葦子の海を往来して、平時は漁業を、時には格好の獲物に遺うと、海賊稼業に転じた。いわゆる海の益荒男であつた。彼は臼杵荘の大神氏を後楯とし、佐伯の海辺に本拠を置いて葦後水道を横行した。その行動範囲は、北は周防灘から安芸、備後の海、南は伊予の宇和海、土佐の海から日向灘にかけてであつたが、大神氏の命によつて筑前の海、豊後方面にも出没した。彼は是基とよばれたが、それは彼の取らなつたそのように呼んだもので、水名ではなかつた。左は彼の祖先には佐伯

部の鞍職といふものがあり、その族は伊予から移つてきたと伝えられた。佐伯部の鞍職は推古天皇の成金人(うでごうり)で市井島比売命の託宣をうけて、安芸の鞍島神社を創祀した。鞍島の祝職佐伯氏の祖である。なおこの佐伯氏族は宗像神あるいは住吉神の奉仕者として、筑前各地に分布している。

佐伯部の海民たちは、是基を中心に雄神(市井島比売神)を祭祀したが、佐伯荘に大神氏が進出するようになって、八幡比売神と混淆し、大宮八幡宮の祭祀となつた。ここまで推測してくると、歳少ない佐伯地方の古墳、松浦ニ又、大入島荒網代の東島、長島の空剣山などの円墳が、すべて海岸部にあることを思つた。これら六、七世紀のものであるから、佐伯の是基の墳ではないであらう。しかし佐伯部の海民たち(海人衆)がその首長と仰いだ人の墳ではなからうか。どうもそのような気がしてならない。

報告

佐伯地区社会教育委員連絡協議会より
第一回おけぼの賞の表彰を受けたこと

表彰状

第一回おけぼの賞

佐伯史談会殿

貴史談会は昭和三十三年から十八年間郷土史の調査研究及び文化財愛護や保護思想の普及活動を通し社会教育の振興発展に尽力されました。茲にその御功績をたたえ、第一回おけぼの賞として表彰します。

昭和五十一年二月二十日

佐伯地区社会教育委員連絡協議会

会長 高野新太郎 印

(おわり)

。上掲のよう表彰状と共におけぼの賞の表彰盾を高水会長が史談会代表して受けました。

。副賞として佐伯信用組合からの賞金格万田も頂きました。

。尚その席上個人として羽柴弘がゆまひの賞として表彰されました。併せて報告いたします。